

# 第37回全国中学生人権作文コンテスト宮崎県大会 「宮崎日日新聞社賞」作品 全文掲載

2017  
December  
14

新聞掲載

12月2日に「第37回全国人権作文コンテスト」(法務省主催)において、中学2年生の仲本愛さん(高鍋東小出身)が法務次官賞(主要11作品に数えられる名誉ある賞)に選ばれたことを本校ホームページの新着情報にてお知らせしたところでしたが、12月14日(木)の宮崎日日新聞に仲本さんの作文「同じ空の下で」が全文掲載されました。

仲本さんの作文は、国際交流事業で韓国に行き、「無知が偏見を生み、偏見が差別を生む」ということに気付き、「知る事の大切さ」を自分自身で学ぶことができた経験を踏まえて書かれたものです。

なお、この作文は来年2月に「第37回全国中学生人権作文コンテスト入賞作品集」にも掲載される予定です。

第37回全国中学生人権作文コンテスト県大会(宮崎地方法務局、県人権擁護委員連合会など主催、宮崎日日新聞社共催)の入賞作品のうち、最優秀賞、宮崎日日新聞社賞、優秀賞の4作品を紹介する。(作品は、基本的に原文のまま)。

## 宮崎日日新聞社賞

君も見ているだろうか、この青い空を。君も感じているだろうか、この夏色の風を。

私は、この夏、貴重な体験をする事ができた。それは、「決まったよ」という担任の先生の一言から始まったのだ。外から自分の住む日本を見てみたい。自分の中の何がかわるかもしれないという不安な思いだけで、県の事業である「アン・يونハセヨ、少年少女国際交流事業」に申し込んでみたのだ。その決定通知を目の前にして、正直心がゆれ始めていた。なぜなら、軽い気持ちで、参加申し込みをしたもの、実は、韓国という国にあまり良いイメージを抱いていなかったからだ。ニュースで見た韓国のデモの様子は激しく、恐ろしく思っていたのだ。そんな私の気持ちとは反対に、書類の提出説明会と韓国行きが具体化していった。「大丈夫かな、やっぱりやめようかな」という私の心の声に気づいたかのよう、父が「自分の目で見ることこそ大事、知らないことほど恐いものはない」と言っていて背中を押してくれたのだ。

## 同じ空の下で

宮崎市・宮崎第一中2年 仲本 愛さん



フランス語やタガログ語など、まるで地球儀の真ん中に立ち、ぐるぐる回っているかのように、世界を体じゅうで感じる事ができた。初めて食べた韓国での料理。日本とは、全く違う味に少しとまどいながらも、韓国の習慣を聞きながら味わう事ができた。そして、さらに私は、韓国と北朝鮮の国境を見ることもできた。広大な土地が広がるなかフェンスとフェンスで分断された土地、いや土地だけではない。分断された家族もいることを知り、胸が見えない何かでしめつけられたようになり、苦しくなってしまう。ニュースや新聞では知り得なかつた事実を目の当たりにし、私の中の何がかわろうとしていた。

韓国滞在四日目からは、いよいよホームステイ。私は、翻訳機はできるだけ使わず自分の持つ表現力でとにかく伝えてみようという決心を決めた。そんな私の思いに伝えるかのようにホームステイ先の家族も身振り手振りで伝えてくださった。私は自然と家族の一員として溶け込む事ができたのだ。国立中央博物館や戦争記念館にも連れていか

てもらった。今まで、知らなかった、いや知ろうとしなかった韓国と日本の歴史がそこにあった。日本から見ると韓国、韓国から見ると日本。互いに立場は違っても人を愛する気持ちに変わりはないこと、記念館の方が語って下さった。私は今まで、自分がどれだけ狭い視野で物事を見てきたかをあらためて感じる時間だった。その日の夜、もう一つ出来事があった。ホームステイ先の私と同じ年の女の子と話をしていた時のことだ。突然、深刻な顔をして、私に言ったのだ。「日本に対して、私は嫌悪感を持っていて、でも、今回の国際交流に参加して、愛に出会って、そんな思いはまちがいがいい」と。私は、返す言葉がなかった。なぜなら、私自身も同じ思いを持って、韓国に来ていたからだ。そのことを、見透かされたように思えたのだ。さらに、彼女は、自分の思いを素直に打ち明け、私に何もしていないのに、謝ることまでもしてくれていた。そんな彼女の姿はさすがに立派で、私はただただ彼女の顔を見つめてうなずくしかできなかった。

私は、ベッドの中で考えた。私にとって、今まで偏見、差別は関わりのないものだと思っていた。しかし、それは間違いだということを知った。女から教えられたのだ。自分の思いだけで判断し、近寄ろうともしない、知ろうともしない、そのことが、私自身が最もいやだと思っている、「偏見や差別」につながっているのだ。私の心の中にも、いつも簡単に住みついてしまっていた韓国に対する偏見に気付いた時、そんな自分に対しての怒りよりも、恐ろしさを感じてしまった。「偏見や差別」は、特別な感情ではなく、無知や無理解と常に隣合わせにあるものだと思う。出発前に父が言った「知らないことほど恐いものはない」という言葉が、彼女の「今までごめんさい」という言葉が重なって、ぐるぐる頭の中を駆け巡っていた。

韓国に行く前と今とでは、見上げる空の色が違って見える。その空を見上げる時、私を大きく変えてくれた韓国の友達のことを思うようになった。言葉、文化、肌の色が違って同じものに感動し、家族を愛し、友を大切に思う。そんな心は遠くにいてもつながっているのだ。そんな思いに直接触れ、知ることができた十四歳の夏を私は決して忘れない。これはいいだろう。そして、これからもこの空を見上げるたびに、「知る事」の大切さを心に刻みながら、明日への扉を開いていこうと私は思う。

## 思いやりの心大切に 中学生人権作文コンテスト県大会